

第2回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年度6月19日（日）午後1時30分～午後4時30分
- 2 場所 長野県上田合同庁舎 講堂
- 3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	滝澤 清登委員
芹澤 勤委員	中沢 裕委員
遠山 順孝委員	西村 廣一委員
小林 将喜委員	市川 久由委員
太田 節委員	原 貞次郎委員
荻原 拓次委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日はお忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。

それではただ今より始めたいと思います。

委員長よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

皆さん、お約束とはいえ、日曜日の午後時間をお割きいただきましてありがとうございます。本日は和泉委員がご欠席ですけれども、あとは全委員のみなさんがおそろいでございます。本日、4時半までのようしくお願ひしたいと思ひます。

それでは座って進行させていただきます。

それでは、ただ今から第2回目の第二推進委員会を開催させていただきます。お手元の次第にのっとりまして進めさせていただこうと思ひます。途中で1回は審議のきりのいいところで休憩を取りたいと思ひています。

審議がどの程度進むか分かりませんが、一応4時半を今日の会議の終わりと考えていますから、審議途中になるようなことになるかもしれませんが、正確に終わりはしたいと、考えていますので、ご理解いただきたいと思います。

それでは、この委員会を開くにあたっては、教育委員会の定例会が終わったあとというお話であったわけです。当然のことながら、6月14日に教育委員会定例会が開催され、それらの説明、並びにこの委員会の皆さんから、資料の提供を求めた点が幾つかあります。その資料の説明、あるいはまた他の委員会でも資料を要求しているようでありますから、併せてそちらの資料も出たものに対しては事務局のほうから説明をいただきたいと思います。

では、事務局のほうで、よろしくどうぞ。

5 資料説明

植松主任教育支援主事から資料説明【説明内容省略】

6 議事

(飯島委員長)

ありがとうございました。

大変な資料であります。前回いただいた資料もたくさんある中で、また追加のこれだけの資料が出てまいりました。質疑応答に入るわけですが、ただいま説明がありました資料について、何かご質問、また追加でも説明をいただきたい部分がありましたらどうぞ、ご発言、ご意見をお願いいたします。

(原 委員)

幾つかあるのですが、まず資料2番、「高校再編整備に係わる魅力づくりの例」というところでございますが、これはまず教育委員会の内部でお作りになったのでしょうか。そのことをまず、確認させてください。

(飯島委員長)

どうでしょうか。

(柳澤教育主幹)

資料2につきましては、先ほどご説明させていただいたとおり、6月の教育委員会定例会の中で、教育委員の皆さんに了解をいただきまして、この資料1と2につきましては、推進委員会の審議の参考にとということで、適切な資料であろうということで、お認めいただきお出ししたところでございます。

(原 委員)

私が申したいのは、どなたが、個人が、どこでお作りになったかということでございます。

そこで、またこれでお聞きしたいのですが、例の最終報告のパブリック・コメントにもたくさん載せられていたものに、いろいろな高校が取り組みの努力をしているので、そういうことは丹念にすくい取ってもらいたいという文章があったと記憶しておりますが、例えばどこの項目にあるのか、よく分かりませんけれど、今、長野県の幾つもの高校で、例えば生徒や、あるいは地域、あるいは父母が参加する、三者協議会とか四者協議会というものが随分進んでいるように承知していますね。例えば、そういうのはどこにあるのでしょうか。

それからもう1点は、少人数講座編成によるきめ細かい指導というものがあるのですが、その魅力づくりの例に、少人数編成とかかわる、例えば30人学級というものも、こういうところに載せられるべきではないかと思うのですが、そこについて発言をします。

もう1点お願いします。資料6の多部制・単位制で多部制・単位制です。私は定時制に勤務しているものですから、これには大変深く関心を持っているのです。その裏面に4番

のメリットということが何点か挙げられています。同時に多部制・単位制については、メリットと同時に、心配な点もあるわけですね。デメリットはないか。それについても、お尋ねしたいと。

以上です。

（飯島委員長）

はい。議論の中でやっていくべきものかもしれませんが、もしお答えできるようでしたらどうぞ。

（柳澤教育主幹）

これまで89校いろいろな形で、魅力づくりには取り組んできているわけで、今のお話のとおりでございますが、資料2につきましては、これから高校の再編にかかわって、魅力づくりをどうしていくかということの、ひとつの例示ということで挙げたものでございまして、これまで各学校が取り組みをしてきたことの上に立ってさらにという部分での資料でございます。

したがってそれぞれ今、取り組んできた部分についてすべてを網羅しているということではございません。

それから少人数学級にかかわって30人規模学級というお話がございましたけれども、現在の状況は、1学級40人ということで算定をされておりますので、基本はそこにベースを置いていくということでございます。また少人数編成講座というのは、これは学級の基本規模は1学級40人ということの上に立って、それをどう、実際の授業形態の中で運用していくかというようなことで、ご理解いただきたいと思います。

それから多部制・単位制のことについてであります。デメリットというお話がございました。デメリット言えるかどうか分かりませんが、配慮していくこととしては、単位制の場合ですと、生徒1人1人の主体的な時間割というようなことが、大変重要になるわけですが、それに対するガイダンス機能等を充実させていくことをしなければ、生徒の全くの自主性に任せるということでは、うまく組めないということもあろうかと思っておりますので、そういった点は配慮する必要があるかと、こんなふうに考えております。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

どうぞ。荻原委員。

（荻原委員）

資料1で、教育委員会定例会の決定事項とありますが、これは魅力づくりの例は、決定事項というか、参考事項で、何を決定したのですか。

（飯島委員長）

次第のところに、「第830回長野県教育委員会定例会における決定事項について」と書いてありますが、この決定事項とは何なのですか。

(柳澤教育主幹)

これは6月定例会の中で、いろいろなさらに具体的に検討できる資料をとということで、幾つか資料提示をさせていただいて、その中でこの資料1と2につきましては、その後その推進委員会のほうに、示していく資料として適切であろうということで、そういうことを決定していただいたということで、これをお出ししたということです。

(荻原委員)

資料の決定という意味ですか。

(柳澤教育主幹)

推進委員会のほうに、どういった資料を提示していくかということで、この2つが決定されたということです。

(飯島委員長)

資料提示の決定だそうです。インターネットにも、その2つの資料は出ておりますね。ほかに資料等についてはございませんか。

(太田委員)

よろしいですか。

資料3ですが、都道府県別の再編整備計画等の進捗状況をみると、長野県は遅れてしまっているわけですね。何でこんなになってしまったのか。この背景を教えていただけませんか。

(飯島委員長)

いかがでしょうか。

資料の説明よりも、核心に入ってきたような感じがしますが、お願いします。

(吉江高校教育課長)

今日、お示しいたしました資料ですと、資料12のところにも出てまいりまして、過日の第1回の推進委員会のときにもご説明した内容でございますが、ご覧いただきますように、まさしく平成元年、2年のピークを迎えるにあたりまして、学校の数を整備し、当然ながら、私どもの今のこの表自体が、今生まれてきているお子さんをベースにした表でございますので、恐らくはこの減少というのは想定できていたかと考えています。それについてなぜかというところでおっしゃられてしまいますと、ある意味では長野県の場合には、ひとつとしては景気動向も平成の初めのころはよかったということから、場合によれば社会動向を甘く見ていたということがあったのかもしれない。

ただ教育委員会の事務局内で申し上げますと、平成10年に高等学校の改善充実についてという内部的なひとつの方向性を示した経過がございます。ただその折には、今回平成15、16、17とこの時期に至るように、いわゆる外部の委員さんをお願いしての検討委員会、さらにはそれに続いての、今お願いしているような推進委員会ということで、外部の方々か

らお聞きして、いろいろ検討するということを設けておりませんで、まさしく教育委員会事務局内の内部の検討限りで、それで当時も、非常に小規模の学級数になった場合に、分校化して、それでその後廃校にするというような程度の内容でございましたので、現実的に実態が伴わなかったというようなことはあり得るかと考えております。

そんなこともありまして、過日も若干報告書のときに、私もお説明の折に触れさせていただきましたように、最終報告の中で非常に遅れてしまっている長野県の現状のことまで検討委員の皆さまからご指摘をいただいているということですが、そういう意味では若干先行きに対しての甘さ、さらには平成 10 年につくったものに対しての、実体的な縛りがあまりにも弱かったというのが現状に現れるということが言えるかと考えております。

（飯島委員長）

資料の説明から取りあえず説明をいただきました。

（遠山委員）

先ほどの 6 月 14 日に県の教育委員会定例会がありましたね。傍聴を申し込んでいたのですが、これは非公開だと、一部分は公開しないと言われて帰ってきました。これは意味も分かるような気もしますが、しかし行った者からみれば何だという。前の日に申し込んでおいて行ったら、一番のところは聞けなかったということで何だということになるのだけど、この会はどうなんですか。この会は、公開でいくんですか。

（飯島委員長）

公開になっていますね。

（遠山委員）

公開なら、本当に要注意のことも、ほんのお話しができるかね。決定できるかね。これを私は、言いたいことです。

それで今、長野県は何でこんなに遅れているのかですね。私は、今説明を聞いたけど、そんな簡単なものじゃないですね。なぜ遅れたかっていう、そのところが分からない人が来ているわけだ。だから、今、こういう討論がどうなっているか、もっと率直にやってもらいたいと思うんです。

これからこのまま、全部果たして公開でいっていいのか悪いのかね。この 14 人に任されているわけです。大変な、いろいろな問題があって、ここへ来ているわけだ。

公開でやるならやるで、いいですけどね。

（吉江高校教育課長）

いいですか。

すいません、第 1 回目の推進委員会のときに、一度お諮りしているかと思います。いわゆるこの会自体を公開でやるかどうかということは、第 1 回目のときにお諮りした上で、公開でいくというようなことを取りあえず、委員の皆さまのご決定をいただいたというこ

とで認識はしております。

ただ、しかしながらその折にも触れていただいたかと思いますが、今後内容的に公開がふさわしくないというようなお話があれば、その場において非公開という形が当然あるということで私は認識しております。

実は第2推進委員会に限らず、1から4までの推進委員会すべてにつきまして、それぞれお諮りをした上で、取りあえず公開で可ということで、各推進委員の皆さまのご決定をちょうだいしておりますが、ただ、しかしながら今、町長さんからお話がございましたように、もし今後非公開が好ましいということであれば、ある意味ではその会合の、ある時点から後、例えば本日の場合もそうですが、本日もそれを審議している中で、その後は、非公開のほうが好ましいというようなご判断を委員さん方の発議でご決定するとなれば、それから先は非公開ということは当然やむを得ないと考えている次第でございます。

（飯島委員長）

よろしいでしょうか。

（遠山委員）

あの非公開にしろと、私は言っているわけじゃないです。しかし非常に言いにくくなる部分もあるでしょう。学校名を具体的に審議するなどの場合にはね。これはみんな任されているから。地元の、後ろにみんなバックがいるからね。そんなことを考えてもらわないとね。

（飯島委員長）

はい。第1回の委員会のときにも、この議論が少し出されたと思います。

私たちは、高等学校改革プラン推進委員会の設置要綱に基づいて委嘱されておりますから、その範囲の中で十分審議が尽くされるかどうか分かりませんが、報告できなくなれば、できないという回答を出せばいいと思います。先は、私はここで十分皆さんで討議をして最終報告をすればいいのではないかなと理解しておりますが、いかがでしょうか。

（吉江高校教育課長）

今、委員長さんからお話をちょうだいいたしましたけど、本当にこの場でいろいろな項目は基本的に私どものほうから4つの項目についてお願いしてあるわけなのですが、そのものにつきまして、それぞれご議論をいただいて、私どもの立場とすれば当然ながら集約した報告をちょうだいしたいというスタンスではございますが、審議の中で最終的な報告の内容は当然ながら委員の皆さまのご検討の中で、お決めいただければと考えている次第でございます。

（佐藤副委員長）

ちょっとよろしいですか。

今日の議題を見ますと、議事ということになっている、要するに議事です。その中で、やはりこの3つの議事の内容を見て、これは公開でもいいかなと、この限りではね。です

から私は今日は公開でやられたらいいのではないかなと思います。

たまたま話に聞きますと、候補ということはないけど、学校名が上がってくるというようなうわさもあったのですが、今日はその学校名を挙げなかったというのは賢明であるし、公開でも十分耐えられるなと思って出席しております。

ですからこれから、今日この議題について当然これから議論するわけですから、この議題の進捗状況を見ながら次回はどうやる、こうやるとその都度決めていけばいいのではないかなと思います。

ですからあくまでも今日の議題に沿って進めていったほうがいいかなと、そういうことでいいんじゃないですか。

（飯島委員長）

最初、事務局のほうから説明もありましたように、第1回のときに委員の皆さまの合議で公開しましょう、それから議事録で、という話で決定をしておりました。

ですからこれから委員会が、今の佐藤委員のご発言のように、進捗状況によってこれから先はちょっと公開だと言にくいな、議論しにくいなというところがあって、委員の皆さまの要望によって、ここから非公開ということも、あるかもしれない。そんな形でこれから進めていってよろしいでしょうか。

（荻原委員）

今、その議論をするのはちょっと早すぎるのではないかなと思います。

（飯島委員長）

その都度、この委員会の中で、いろいろなことに対して合議して決めていきたいと思います。

（芹澤委員）

議論を整理するといいいのかと思うのですが、この委員会に委託されて議論するのが、魅力ある高等学校づくりに関する事項と、もう1つは総数の決定事項で大きく2つに分かれてるのかなと思います。

そういうときに、今、公開非公開にかかる部分は、総数の決定事項に主としてかかるから、考え方によってまず魅力ある高等学校づくりを、あるいは多部制を含めたものを先、2カ月か3カ月集中的にやって、どちらが先でもいいんだけど、数の決定を後のほうに集中的にやって、その部分については、本音で、これは皆さんの議論だけれども非公開にするとか、同時にやっていくと、途中から非公開にするべきだとか、いろいろな議論が出て、次回非公開なんて難しいと思うんですよ。だから議論を、2つのうちの1つ集中的に3カ月なら3カ月、4カ月なら4カ月、これはいいんです。そういうふうに分けてやれば、多くの場合は数を決めるときが、非公開ということで本音が語れるためにということが出てくると思うんです。

だからそういう議論の仕方はどうですかね。そうじゃないと、毎回同じことをやっていけると、途中からどの部分は本音でやるから非公開にするというふうになっちゃうと、傍聴

に来られる人がとまどうんじゃないかなという気がするのですが。

（飯島委員長）

資料の質問という形から、ちょっと方向がそれたようでありますけれども、でも大事なところだろうと思います。県民が非常に注目をしているし、この地域の皆さんが大変気にしていることですから、その辺は今、皆さんから出たご意見を尊重しながら、委員会を公開か非公開かは、十分な審議ができるような雰囲気をつくっていくということでご理解をいただきたいと思います。

それでは、資料の質問のほうは、ほかにございますでしょうか。

（原 委員）

前回の資料のこともよろしいですか。

前回、それこそ今、いつ議論するかというお話がありましたが、総数の問題ですね。そのことにかかわって、どうしてもお願いがあります。それは今回の、この委員会への検討依頼事項の委任ですけれども、現在の学校数から再編成後の最終的には76、ここなんです。報告書にあるように、5.5学級で76というのが導き出されているのですが、これは前回の資料7でいきますと、どこの年度を見据えて5.5学級76というのをお出しになったのでしょうか。

これは逆算すれば、5.5、76を乗ずれば418になってくると思うのですが、ここへは、ある面では特定では418という基準はありませんから、どの辺を基準にお出しになったのか、そこをはっきりさせていただきたい。

（飯島委員長）

事務局のほうでお答えください。

（吉江高校教育課長）

お答えさせていただきますが、今、確かに原委員さんからもお話ございましたように、418という数字でございますけれども、過日の資料7をご覧くださいますと、そこにありますように、ここの中の、例えば最終の平成31年をベースに見ますと375という枠になっています。

それでこのクラス数でいきますと、それよりもちょっと仮に5.5という数字を使って目減りするわけでございます。それでそんなことから、もし報告書をお持ちでございましたら、報告書の18ページをご覧くださいなのですが、私どもは基本的に平成31年までを、全体的な平均で見たいこうとか、ある年度でピタッときますと、劇的な数字になってしまうので、平均の減少を見たいこうということで、基本的には帯で計算している。そして帯で計算した上で、帯で計算した上である程度の時点で、当然ながら縦に見なければいけませんので、年次の上での数字も見ながら完成形を見たという形で出していただいて、それをやりますと、平成18年の折れ線グラフ、下に学級数校の推移の中に、折れ線グラフがありますが、折れ線グラフの上から2番目のグラフになります。

ですからこのパターンでいまして、おおむね5.5台を維持しながら、これでやっていっても最終的には平均学級数が5学級を割り込むというのが最終型であるので、過日もお

話し申し上げましたように、ある程度の時期に再度の見直しを恐らくかけなければいけないのかなと考えている次第でございます。

（飯島委員長）

原委員、よろしいですか。

数の件、これは私たちに託された検討項目の再編整備の件に移ったときには、この辺のところはもっと詳しくご説明をいただいたり、議論が出てくるかと思います。

このまま、公開か、あるいは数のことをやっておりますと、今日は何のために委員会を招集したのだという形になってしまいますので、取りあえず私たちに委託をされました 3 つの検討事項があります。「魅力ある高校づくり」、「県立高等学校再編整備」、「総合学科、多部制・単位制高校の配置」。先ほど芹澤委員からも出ましたように、県立高等学校の再編成はひとまず脇に置いておいて、魅力ある高等学校づくり、その中に含まれてくるでしょう総合学科と、多部制・単位制高校の件について、議論を少し深めたいと思いますけれども、よろしくどうぞお願いします。

（中沢委員）

では、よろしいですか。

総合学科は、現在県下では塩尻志学館高校と先ほどお話がありました。かつての塩尻高校ですね。それが志学館高校に変わったときに、総合学科が設置されて、そして現在に至っているということですが、確かに今までにない、いろいろな選択幅が広がったり、進路先、職業観というのが持たせるという点では、非常に大事な学科であると思います。

そのことから総合学科の高校を、ここにあるように 4 地域に 1 校ずつ設けるという方向については、全県の状況から見ても、私は賛成です。

多部制・単位制高校においては、現在長野県には若干似ている部分はあるんでしょうけど、これだけの高校というのではないわけです。単位制高校というのは、例えば長野商業定時制とか、あるいは松本の筑摩高校とか、やっているわけなのですが、多部制・単位制高校ということについて、生涯学習という観点から見ても、それから今の高校生の多くの途中で残念ながら退学する、その生徒がまたどこかで勉強を続けていく。そういうような生涯学習というような観点から見ても、いいとは思いますが、どのくらい 4 通学区に 1 校ずつ必要性があるのかどうかというのは、私自身は疑問に思っているところなのです。

（飯島委員長）

関連でもいいですし、ほかのご意見でもいいです。

（荻原委員）

魅力ある高校づくりの中に、この中には大学進学とか、そういうことは書いていないですね。例えば、うちの方では野沢北高に理数科をつくったというのは、多分大学進学をよくしようというもくろみがあったんじゃないかと思うし、最近では、例えば小海高などに進学科というようなコース制をつくっているわけなんだけど、それについては、やはり大学進学希望が多いということで、やはりコース制はつくったと思うんですよ。

大学進学をいつも下から何番目と言われるくらいの長野県ですから、その辺は生徒の希望というか大学進学志向が強いと思えば、やはりそれは進学校というか、徹底的にやる。中高一貫含めて徹底的にやるという部分も、魅力ある学校づくりの中には当然必要なのではないかと思います。

もう1点は、魅力ある学校づくりというのは、自宅から通えるという部分がやはりある程度魅力がある。1時間もかかって、公共アクセスのない地方でやるというのは、大変な負担だと思えます。30分くらいかけて自転車で行くのは仕方がないと思いますが、そういった意味で魅力ある学校づくりの中に、現在の高校を動かさないということなのでちょっとおかしいのですが、もうちょっと交通アクセスを考えた上で、やはりその数とかを考えていかないと、そのたびにタクシーを使ったり、父兄が送迎したりする負担等を考えいかないと、なかなか皆さん安心するわけにはいかないと思っています。その2点について、問題提起したいと思っています。

以上です。

(飯島委員長)

どうでしょうか。

大学進学のことについてどうですか。

(市川委員)

お願いします。

私は、3月までは進学指導を高校でやっておりまして、中学へ戻りましたという話は前回申し上げたと思います。

子どもたちが、どういう教育環境で育っていくかということを考えますと、やはり単位制・多部制の高校の必要性を感じます。特に、交通の面から考えまして、長野県は非常に交通の便が首都圏に比べますと、良くないものではないかと思うわけですが、それをかんがみまして、4地域に1つは最低でも単位制・多部制が欲しいなと、私は考えています。

というのは、小学校、中学と状況は変わっていておりますけれども、基本的には学年という塊で、ところてん式に、みんな同じことを同じようにやっていくことが原則でして、左を見て右を見て、前後を見て、皆同じようにやっていくと。そしてその学年は、あるべきことをやりなさい。1年生は1年生らしく、3年は3年はらしくという、そういうような一律な一斉授業の集団主義で育ってきているのですが、みんな同じ、同じやり方。しかし最後に、高校の入り口、あるいは中学の出口で順位で困る。同じにやりながら、最後には細かく分けられてしまう。

この辺がいつも子どもたちの意欲の低下、ある一部の子にとっては意欲の喚起になるかもしれませんがけれども、意欲の低下、学習力の低下につながっていると私は考えております。したがって高校に行きますと、子どもたちが評判のよい学校や、魅力の少ない学校など、そういうようなものでますます意欲を失うようなケースもある。

ところがこの単位制・多部制というのは、高校へ入りまして子どもたちはやはり同じように一斉授業をして机の前に座り、同じような授業を毎日受けるということを強いられることが多くなってくるわけですが、最近の違いまして選択制がありまして、1クラスあた

り10人とか、少ないクラスは5人なんていうことで授業を受けているクラスもあるわけですが、それにしましても同じように過ごしていくということ、同じようにやっていくということ。しかしそれに耐えられない子どもたちも結構おりまして、その分につきましては中途退学、あるいは私立への転学、あるいは長野市にあるような通信制への転学というケースも現れてきました。

ここの中でやはり東京都のエンカレッジスクール、それとこれを見ます中に、交通の便が非常にいいですから、1人1人を、個の力を大事にしたカリキュラムを据えた学校については圧倒的な人気で、交通の便が関係しますけれども、0.何倍だった高校が、4倍、5倍というような応募になってくる。子どもたちには、自分で自分の道を切り開いていく、そういうような気持ちがまだまだ残っている生徒がたくさんおりまして、それに対する対応が十分にされている学校があれば、飛び付くということが見られています。

長野県はやはり同じように、自分でこうやっていくという子を育てていくという、そういう環境の学校が地域に1つは欲しいなと、そういう気持ちでいるわけです。

先ほど事務局のご説明にありましたように、オリエンテーリングも非常に充実させながら、1人1人の将来の見通しに合わせたカリキュラムということは、大変難しいですが、非常に大切な点ではないかと感じています。

(飯島委員長)

いかがでしょう。

(佐藤副委員長)

いいですか。

魅力ある学校づくりなんですけど、これは実は教育に携わっている人は既に十分承知ですが、魅力ある学校づくりというのは、これは非常に簡単のようで難しいです。

私の経験から一口で言うと、やっぱりあらゆる点でパワフルな組織をつくってやるということがまず第一です。そうするとその中に、いろいろな選択肢があって、先ほど言った魅力あるシナリオがその中で実現できる。ところがやはり、パワフルでないと、個々の魅力ある、個々のことをやってもなかなか、対症療法的形になってしまって、ここに拳がっております魅力づくりのいろいろな例がありますが、これはもう全部学校の先生だったら、そんなこと全部頭の中に入れてやろうとしていることです、多分ね。

ですからやろうとしても実際に、学校がパワフルでないからできないんですよ。ですから私は、そこところがやっぱり、自分の地域から学校へ行けるのが一番ベターな魅力かもしれませんが、その魅力と実際にいろいろなことが学べるというのをてんびんにかけたら、どっちが魅力があるのかということになりますね。すごく端的に言えば、進学校の大規模校というのは、誰が見たって魅力がありますよ。みんな無理したって行くのですから。それはなぜかって言ったら、やっぱりあらゆる点でパワフルでいろいろなメニューが用意されているというところが魅力なんだと思います。端的な話になってしまいましたが、私はそう思います。

だからなかなかやろうと思ったって、1学級や2学級規模ではできないですよ。先生の数に限られてしまっているんですから。ですからいろいろなメニューをいくら用意しても

限られてしまう。いろいろな点でいろいろなメニューが入るような組織をつくるということが、このテーマの一番の本題だと思います。

（小林委員）

最終報告 20 ページに書いてございますけれども、『(4) 多部制・単位制高校と定時制、通信制の生かし方』という、その一行、通信制課程も併設するということですが、私も通信制を大事に考えていかなければいけないなと思います。今、個々のニーズというような話もありました。やり方によってはできるのではないかなと思います。

ほかの県の様子を本で読んだりしましたが、生徒は自分で週 2 回学校へ行きましょとか、1 回だけでいいですとか、あるいは仕事を持ちながら、それこそ自分のニーズにあったやり方をしている。あるいは週 2 回午前中学校へ登校して、午後は進学するために自分で自分の学習、勉強をする。そんな感じの高校もあるようです。

長野県とすればもうちょっと幅広く、1 人 1 人の要求に、あるいは要望に応えられるような、そこまで広げられる場面があれば、途中で学校へ行けなくなった子、あるいは学校をやめざるを得なかった生徒たちは救われる、ではないだろうか。多部制・単位制のと併設するほうがいいのか、今あるものを、そんな方向に変えていけばいいのか、一律にスクーリングを、いつやるから出て来いと、いうのではない方向。もっともっと生徒たちに、開放された生き方ができるような、そんな方向を目指せばいいなと思っております。

（太田委員）

私は、民間会社（製造会社）に在籍していますのでちょっと視点が違うのかもしれませんが、会社が生き残るには、お客さんを満足させていけるかにかかっているということで、これが一番大事になってきますね。

顧客満足といういい方をしていますが、第 1 ステップが顧客の不満を解消する、ステップ 2 が顧客の満足度を高める、ステップ 3 が新しい価値を創造して、それを提供して差上げる、そんな考え方なのですが、学校経営では生徒がお客なんですか。私はよく分かりなのですが、生徒をお客というのは、教育の論理の中ではおかしいのかもしれないけれども、生徒の意識というのはどうなっているのか。それから学校の先生方は、どう考えていらっしゃるのか。その辺のところ、皆目分からないものですから、論議ができないんです。この辺のところをデータがあったら示していただきたいし、学校の先生方の率直な意見を本当に聞きたいと思うんですね。

だからこの席に、先生方を呼んでいただいてもいいですし、生徒を呼んでいただいてもいいので、お話を聞いてから、我々は判断せざるを得ないと思っておりますが、いかがでしょうか。

（原 委員）

ちょっと、議論がしづらいなと思っているんですね。つまり魅力あるという問題を、一般的に論ずる 1 本の流れがあり、それから一方が総合学科があり、多部制・単位制があって、これも最初のうちだから仕方がないと思うのですが、ややそれも集中してやっていくプロセスを協議してやっていくようにしていただきたいと思います。

それで今、先程の太田委員さんの意見について私の考え方を申し上げたいと思います。

私は結論的から言えば、生徒は顧客ではないと思いますね。スーパーやデパートへ行って、好きな商品を買うというのは、やはり教育は違うのではないか。もっと本質的に言えば、学校の一番中心の主人公ですよね、生徒は。我々はその生徒の学習をいかにサポートするか、教員と学校は、いかにその子どもたちが1人1人学習し、成長していくかということをサポートする。そういう意味で、決して顧客で、「さあ、皆さん。今度2年生になったらいろいろなメニューがあるから、どれどれを選んでください」というように、そういうサービスの部分は、それはあるかもしれませんが、本質的には違うのではないか。そのことは申し上げておきたいと思っています。

（太田委員）

ただ、魅力ある学校というのは、先生方が「これが魅力ある学校だ」といっても生徒から見れば「魅力ある学校というのは、これではない」と言うことも考えられると思うのですが。

（原 委員）

それは、例えばあります。外見から、A高校には「あ」という学科がある。B高校には「い」というコースがある。それが簡単に魅力と言えるのでしょうか、という疑問がまずありますね。

（太田委員）

そうですね。「魅力とは何ぞや」ということですね。

（原 委員）

そうです、そこなんです。

例えば、とても分かりやすい例でいきますと、8 学級規模の大規模校があります。その1つのクラスが、何とか科といいます。そこに8分の1が入る。そうするとその学校全体が魅力というふうに、今は受け止められがちですが、いかがでしょう。8分の7は、普通科で行っているわけですね。あるいは6分の1の学校でもいいですけども、本当に今、太田さんがおっしゃるように、「魅力とは何ぞや」という難しさ。同時にその議論もしなければいけない。

（太田委員）

そうですね。改革案が出された背景には、今の長野県の高校に魅力がないのかどうか。そういうことから魅力ある学校づくりというふうに転換されたのか、じゃあ何が今、学校で問題なのか。そういうことが、我々が分からないわけですよ。

やはりこの問題は、論議するに当たって聖域をつくってはいけないと思います。一番言わなければいけないところが、一番問題だったりするわけです。だからそこを、洗い出してもらって、本音を出してもらわないと論議になりませんよ。

(飯島委員長)

最終報告の2ページくらいのところに、いろいろ書いてありますね。

平成6年度以降は97%の進学率うんぬんを書いてありまして、非常に子どもたちは多様化している。中ほどに学習内容が理解できない、また理解できないことが多いと答えているという生徒が41%いるというのです。41%も分からない子どもがいたら、これは学校でしょうか。また先生が教えているのでしょうか。また子どもたちが、教わる気持ちがあるのでしょうか。これは資料の中から読み取れることです。

そして15年度の中途退学者は、1,047名である。これはちょっとした学校1つ分ですよ。その生徒が中途退学している。そしてその中ほどに、県民アンケートの結果を見ると、1位が「非行やモラルの低下」、2つ目に「教職員の資質・能力の向上」というふうに、県民は求めているのですね。

ですからこの資料を見ていると、議論をしていく上で、ここに読み取れるものが幾つかあります。ただそれが正しいかどうかは、また別として、資料提供の中にあるような気がするんです。

何でそんなに中途退学するような学生が、出てきちゃっている学校なのか。太田委員が言っているように、魅力あるならば子どもたちは中途退学はしないと思うんですよ。ですからこの辺のところ、どういう原因で中途退学者が多いのか。その上に書いてある、学習内容が理解できないから退学しちゃうのか。

学校ですから、学ぼうとしている、それが分からなければ魅力はなくなってしまうのだと思うのですが、その辺のところも含めながら、この資料の中にあるものですから、お話をさせていただきました。あまり委員長は発言してはいけないんですが、どうぞご意見をお願いします。

(中沢委員)

中学校側から、魅力ある高校ということを考えてみますと、私もいろいろ進路指導をやっていて生徒と接する中で、やはり考えることは大きく2つあります。

1つは、その子がやはり将来へ向かっての進路実現ができる。職業選択ができる。そういう保障ができる高校だろうと思います。

それからもう1つは、行ってよかったという価値が見いだせる。さっき太田さんが、ちょっと言いましたが、何か新しい価値が見える。この高校へ行って新しくこういうことができるようになった。最終的にその2つじゃないかと思って、今まで中学校の生徒を見ていて思いました。

そういう子を、高校側はそれなりに努力はされているでしょうけど、そのずれがあるのかとか、また実際問題の日常的な中で、いろいろ課題があるとは思いますが、そのためにまたここまで工夫されていますよね。

かつてはなかったいろいろな、普通科の中にもコース制を持ったり、いろいろな科を持ったりというような、そういう多様性というのが確かに見えてきている、ということだと思いますが、それをさらにどういうふうにしたら、魅力のある高校に進めるかというのが問題点ではないかと思います。

(飯島委員長)

中学側から、子どもたちを見た場合、そんな感じで見ていただいているようですが、
どうでしょう、ほかをお願いします。

(西村委員)

現場にいるもので、言いにくい感じがしたんですが、確かに今、中沢委員がおっしゃったとおり、高校はその思いでやっています。

ただし先ほどちょっと気になったことがございます。佐藤委員のほうから、今学校がパワフルではないというふうに見えるとおっしゃいましたが、どうしてそういうふうに見えるのでしょうか。そこをぜひお聞かせ願いたいのですが、どういった点で、パワフルじゃないというふうに、外から見てご覧になりますか。

(佐藤副委員長)

恐らく、今、言ったように「授業が面白くない」というのが、まずパワフルじゃない。そういう生徒がどれくらいいるかによって、パワフルの度合い、種別というのは変わってくると思うんですね。

学校というのは、本来勉強するところですよ。勉強がしっかりできるような雰囲気をつくってやるということが、まず一番大切じゃないですか。

私は、教育はまず、モチベーション、つまり動機付け、これができれば全体の8割はもう成功したと思えと、こういうふうに私はいつも教員に言いました。動機付けがしっかりできない。そういう動機付けをしっかりする。とにかく楽しいことだったら、自分で調べていくだけでも勉強するわけです。まず楽しいなというふうに思わせる。ところがそれは、私は先ほど規模が問題だと話しましたが、これは我々100メートル競走をやったって、練習しなくても13秒走れるのもいれば、いくら練習したって走れない、いろいろ能力に差がありますよね。ですから私は能力というのは、やっぱりいろいろな能力があるので、その能力を認めるような組織がないと駄目なんです。

そういう意味で、教員の数も多く、いろいろな設備も多いというようなところの中であれば対応できるわけですよ。そういうことで私は、パワフルでないというのは、生徒が学ぶ意欲がないと言うのと同義語なのです。

私も今日午前中、植木の移植をやってきましたんですが、大体元気のない植木というのは、すぐに虫がたかって、外敵にやられる。元気のいいのは、本当に何もしなくてもすくすく伸びていく。だから虫がたかったら、虫を捕ってやればいいという問題じゃないんですね。やはり、基本的なものからきちっとやる。だからパワフルじゃないというのは、すぐ害虫がたかるような植木だなと思っています。

それで、まず学校がつまらないというところの原因はどういうことかと言えば、これは根が深くて中学に入る前の、小学校4年ぐらいからつまずく。そうすると毎日分らない授業を、朝から晩まで聞かされたんじゃないけど、たまったもんじゃない。

そういうことで、私がさっき言ったように、そう簡単に我々が魅力を論じたって難しい。そのために一番我々が何ができるかというと、環境を整えてやるということが、一番大切。その後は専門家がいます。教員は、それで飯食っているわけですから、その人たちに

いろいろ知恵を絞っていただく、そういう環境が整わない中で、これがいくらやってみたところで、付け焼き刃的なことしかできない。

私はそう思います。

（太田委員）

それで、改革案を今度具体的に進めていただくのは、私たちではなくて先生方なんですよ。だから先生方がその気になって、「本当に分かった」と。「皆さんがつくったので納得するところもあるから、何とかこれで挑戦してみよう」と考えていただけるのかということです。ただ我々が論議しただけで、机上の作文に終わってしまうのでは困るわけです。この点について、先生方はどう考えているのですか。

西村先生は校長先生ですから、なかなか言いにくいだろうと思いますが、校長先生というのではなく普通の先生の皆様は、どんな意識なんですか、先生に一度お聞きしたいと思っていたのですが。

（飯島委員長）

厳しい質問ですが、もしここで答えできる方、委員の中で先生は4名いらっしゃるし。

（太田委員）

ええ、4人いらっしゃるので。

（飯島委員長）

もし、お答えしていただければ。

（太田委員）

それで、先生方が「改革する必要がないよ」と、「別に新たに挑戦する必要性もないよ」と言うのだったら、我々が議論してもただ無駄なエネルギーを消費しているだけで、やらないほうがいいのかとも思いますよ。

（飯島委員長）

きつい質問ですね。

実施してもらわなければ何にもならないという話ですね。

（太田委員）

そうですね。

実施の可能性がないならこの委員会は、解散したほうがいいですね。最初から実現性がないのだったら、議論の価値はないですよ。

（佐藤副委員長）

西村先生、当事者だから、具体的だと思いますけど。

（原 委員）

今の太田さんのお尋ね、もうちょっと確認させてもらいたいのですが、例えばこの報告書に基づく、その改革が必要かどうかということをお尋ねしているのですか。

（太田委員）

先生方が、また、学校の現場がこのプランについて、どう考えていらっしゃるのか、これからまた我々が提示していくものに対して、本当に乗ってきていただけるのかどうか、ということです。

（原 委員）

そういう意味ですか。

（太田委員）

前提のプランの段階でもいいですよ。どのように考えていらっしゃるのか。何だ、これはただ長野県がつくただけなんだと、そういう意識で見ているのか、それとも問題意識を持っていて、「何とかしなければ駄目だ」と、改革に取り組む気持ちを持っているのか、です。

（飯島委員長）

ちょっと、また元に戻ったようで。

（原 委員）

話がなかなか進まないものですから、整理したいと思いますが、僕は1点、現実の長野県高校教育が、抱えている問題状況について発言します。もちろん、私の意見ですよ。

それは今までのご発言とかかわらせてみますと、本当にまじめな話、高校生は勉強しなくなりました。これは、ご案内のように、学びからの逃走という言葉が、数年来ずっと使われているわけで、本当に勉強しなくなりました。

しかも2つ目の問題は、勉強する場合も進学のための大学やその他の、上の教育機関に進むための勉強。だからそれを取り外してしまうと、勉強しないと。このことは、私は責任転嫁するという意味ではなくて、今、学校が抱えている、本当に深刻な問題なのです。これをどうするかというのが、私は高校教育改革であり、中学教育改革だと思っているんです。

これは私どもが実際に教科を指導したり、クラブを指導したりするものだけでは、とても負えるような簡単な問題ではありません。

したがって私は改革は、そういう今日の子供たちが、学校としてどう向き合うか。教員はの中で、どういうふう意思統一して、生徒とともにやるのかということです。一番大事だと思っているのです。

2つ目はこちらにいらっしゃる事務局の皆さんには、大変つらい意見ではありますが、この最終報告については、さらにパブリック・コメントがとっても重要な指摘をされていて、非常に多くの方々が、この中間まとめに対して疑問を出されていますよね。

パブリック・コメント、それは中間まとめですから、それに地域懇談会もありましたよね。そういうのを反映した報告書になっているのでしょうかということです。何か、そういうのは聞いたけれども、それにかかわらず報告をまとめて、それを受けて教育委員会がこの委員会を立ち上げ、やったという、私はそういう印象が大変強くて、全体から批判が。その言葉を使っておりますけれども、しかし私は、先ほどの問題、その他いろいろありますけれども、本当に高校の現状はよくない、このままではよくない、何とかしたい。その根幹は、佐藤さんもおっしゃったように、授業が一番軸ですよね。それを中心に子どもたちがあらゆる面での学校生活に参加するという、そこを育てるためにはどうしたらいいかということを考えていきたいと思っています。

ほかの現職の先生方、どうぞ。

(飯島委員長)

お約束の3時になりましたので、休憩にしたいと思います。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

時間になりましたから委員会を再開したいと思います。

続いて学校側の委員である先生方に、ご意見がということが出ていますので、もしありましたら、今、原委員のお答えがありましたけれども、ほかにありましたらどうぞ。

(遠山委員)

魅力ある高校とか、記載にありますけれども、本当に魅力というのが多面な見方だと思うのです。誰が言っていたか委員さんですが、魅力ある高校とはやはり、子どもたちも、いろいろな優秀な子どももあれば、また、学問についていられない子どももあると思うけど、ただそれをいかに何とか子どもの能力を引き出して、学校へ行きたくなるように仕掛けるか、これは大変な仕事です。

いつも家へこもってばかりいた子どもが、皆勤までした人がいるんですよ。1つの高校しか知りませんけれども、3年間皆勤したということです。周りの雰囲気は「一緒になってやれよ」と言っていて、例えばこういう環境で育てば、学問ができるのなら、こんな科学ができるとか、それはそうですよ。学問ができるやつは、何でもできますよ。それでもこれが力じゃなくて、今はこういう時代ですから、もっと違う面で力いっぱい運動をやってみるという、こういうのが大事だね。

夢高の場合は大体75%、運動部へ入っている。これは高校では珍しいですよ。徹底的に自分の思いをやると。それでまず私の考えていることは、親を安心にさせるんだね。やはり親が安心して出せる学校、そういうものを私は引き出すべきだと思います。

親が「あそこはいじめがあって駄目だ」とか、そういうので学校を変えちゃったとかは駄目。そんなことを気にしながら学校へやりたくないってね。

だけど1つはそういう能力とか、教育とはエデュケーション (education) と言うけれども、エデュケーションの意味というのは、辞書を引いてみれば能力を引き出す、ポ

テンシャリティ (potentiality) といわば潜在的能力をいかに引き出すか、これが教育でしょう。日本は教え育てるだけ。私はいつもそう思うのです。

だから 1 つ 1 つ積み上げていかないと、今の学校が悪いとかいいとか言えないですね。これは先生の熱意を見ますし、家族の熱意だって見ますし、社会問題の熱意だって。そういうふうに私は学校を一概に言いますと、学校だけが魅力をつくっていくものではない、こういうふうに思います。それでも一番核になるには先生ですね。先生だけど先生がサボっていたら駄目だけど、とにかく社会とその他家庭と一緒にあって、そして、そういう魅力、その学校の魅力だね。その学校、その学校の魅力、それをつくってもらいたいなと私はそんなふうに思っています。

(飯島委員長)

遠山委員のほうから先ご意見がありましたけど、学校の先生方に太田委員からあったご質問等はよろしいでしょうか。

次長さん。

(米澤教育次長)

教員の中心ということで発言をさせていただいたと思いますが、今、町長さんからもお話ありました各学校の魅力というようなこと、本当にご努力されて、それはもちろんご承知のとおりだと思います。

それから先生方はどう思っているかということで、もちろん概括的いうことはできないわけですが、多くの先生がいて、いろいろな考え方の先生がいらっしゃいます。基本的に先生方は本当に一生懸命にやっています。個人でできることを、恐らくベストを尽くしてやっていると私どもは信じております。

しかし、先生方が個人でできないこともこれもまた事実であります。ですから、学校全体で取り組むことがその次にくるわけであります。学校全体でまたできないこともある。これはこうした時代の中で、状況の中で我々が次の時代を考えなければならなくなる。

もう既に多くの県が取り組んでいることについて、私たちは平成 10 年の「改善充実」を出す中で、述べてきたわけですが、しかしそのときにはさらにそこから先まで立ち入ることができなかったわけであります。

これは時代の要請、時代の声もあったかと思えます。しかし今、ここまで取り組み、時間をかけてまいりました。前年度、1 年 3 カ月かけて報告書をいただいたということで、報告書の中に多くのことが書かれております。必要に応じてその報告書を、行きつ戻りつしながら私どもとすればその報告書、「ポスト報告書」という形で推進委員会の中でご審議していただければありがたいと思っていますところであります。

魅力ということに、さらに言及させていただきますと、総合学科、今日出ている多部制・単位制など、それぞれ魅力と言われているものも、おそらく教育にとってオールマイティのものはないと思います。しかし、オールマイティではないとしてもそれに近いものとして、やはりあるんじゃないかというふうに私どもは思っています。そういうものを考えながら、かつ、この痛みを伴いながら、これだけの再編の、結論まで持ってきていただくということで、具体的にこれから議論をしていただく中で、報告書時に立ち帰るというような作業が必要かと思えますので、またそこを含めてこれから「ポスト報告書」をご審議い

ただければと、そんなふうに思っております。

よろしくお願いします。

(市川委員)

お願いします。

私は学習の動機付け、その他に関しまして考えてみますと1つには純粹に学習に対する動機付けの面では興味、感心というところがあると思います。もう1つは、集団の圧力によるプレッシャーによる学習能力です。3つ目は、お互い学校に通い、同じ教室で学ぶ級友とともにすり合わせ、磨き合いながら動機付けをさらに高める。私はこの3つの動機付けを考えています。

特に私は今、中学にいますけれども高校の出口を見させていただいた結果、やはり子どもたちはもっと大きいその3つ目ではなくて、2つ目の集団の中のプレッシャーでの部分。ここに大きな動機付けを持ってきて、それで倒れた。そういうようなケースが幾つかあったようにも思っています。そのことにつきましてはいつでも、これからティーンエイジャーは、立ち直せることはいくらでもできる。その1つの手段として高校の改革に期待をする者です。特にここに出ています総合学科制、あるいは多部制・単位制につきましてはこれまでのシステムを大きく変えるものだと思います。

私がいた高校でも先生方は大変議論して、大変な努力を今ある枠の中で議論を重ねて、努力をされて毎日、日々を高校の教育の1つ1つの生徒の理解がある、ここにたくさんの生徒が分かる教育資質向上だとか、いろいろありますので、私たちはその当時、過去3年間を振り返りますと、1人1人の先生方は大変努力をされたというふうに思っています。

ただそれはあくまで議論しますけれども、先ほどからありますようにいろいろなお考えの方の中で、議論を重ねれば重ねるほど難しくなっていく。これがそういった結論に至らない。そういうようなことがあります。やはり大きなシステムの、システム的な大きな変革がないと、やはり変わっていかないというふうにしました。いくら現場で努力していても限界にはなっていると思っていました。

あるいは中学で我々は今、毎日毎日が密度が濃いので大きな議論をしている余裕は全くありません。朝7時から夜8時、9時まであるいは、それでも土日の仕事を持ち帰ってやらなければならない中では、大きな改革の議論をする余裕など全くないような、日々のことに追われています。その中で、やはりこういう指針を出していただくということは、ありがたいことだと思います。特に平成31年になりましたら、子どもたちの磨き合いはいったいどうなってしまうのでしょうか。1つのクラスの中に何人の生徒が残っているのか。1つの学校に、100人に満たない学校が出てきたらどうするのか。その中で我々はどういうふうに生徒を磨き合わせて、すり合わせていくことができるのか。それを非常に危ういと思います。

もう1点最近教えていただいたことの中に「簡単なことばかり取り組んでいって、どんどんどんどん落ちてしまう。難しいことにチャレンジすることができない」ところが社会、あるいは高校卒業した子どもたちに待ちかまえていることは、難しいことを乗り切ること、考えなければできないことばかりでして、これは製造現場、サービス業の現場の方々も、会社の方々もよくお分かりになっていることだと思います。持続性が必要。現場で自分の

考えを言わなければならない。難しいことをチャレンジしなければならない力、こういうものを養うわけですね。この大きな課題はやはりシステム的な個に対するきちんとしたシステムの中で全部がこうしようといっているわけじゃありません。1つの学校にそういうところがあって、何か関連ができていいのではないかなということを期待しています。

以上です。

(遠山委員)

ちょっといいですか。

魅力ある高校、そんなふうまくだできれば、あれだね。ある程度の人数を組まなければ魅力はないのでしょうか。私は、小さいころにもキラリと光るものがあるのではないかと思います。

中学校はどうすべきか、もし半分だとしたら。これは数の問題と魅力の問題と一緒にしたら、これはちょっとおかしい議論になるので、この辺ちょっと聞かせてもらいたい。

(市川委員)

例えば、菅平小中学校があります。菅平小中学校の生徒も、先生方が一番心配していることは規模の小ささ、そこで外に出ていったりと、1人1人の生徒の力は十分にある。非常に力強く冬のスポーツでは類を見ない実績を残している。しかしながらやはり外が気になる。そういうことでネットワークが非常に求められている。我々とも下に下りていって交流をしたり。特にこの中で連携型県立高校、ジョイント高校がありますね。ネットワーク化された高校のこういう部分では基本的に問題優先しているところもあるかなと思うのです。

(飯島委員長)

最終報告の中でもありましたように、総合学科高校、あるいは多部制・単位制高校のよさ、期待をお話ししていただいたわけであります。

ほかによろしいでしょうか。

(西村委員)

太田委員のお返事にならないかもしれませんが、私が今、一番思っていることは、高校を卒業した生徒、ほとんどの生徒は長野県にいないのです。日本のいろいろなところへ出かけていくのです。そのときに長野県の教育を受けた生徒は本当にほかの県の生徒とどうやって生きていけるのか、交わっていけるのか。私はそこを一番危くしているのです。

そういう状況を考えて、長野県内でどういった教育をするか。それは他県はどんなことをしているのかということを見ていけば分かると思うのです。私はぜひそこを重点に議論してほしいと思うんですね。ずっと長野県にいれば長野県のよさ、いろいろあります。いいでしょう。でも、現実問題として長野県で教育を受けて、一般社会へ出ていくのです。それが現実です。

それから佐藤委員がおっしゃいましたけれども、やはり学校の先生たちはみんな、それぞれ考えて、どうしたら生徒をもっと伸ばしてあげられるのか。みんな考えています。

いかんせんハードの面が不足しているのです。まさしくおっしゃるとおりです。ハードを県として「こうしてほしい」というのをつくれれば、あとはそれぞれの先生が頑張ると思います。

（佐藤副委員長）

私は市川委員さんのご意見には賛成です。先生方1人1人は本当に一生懸命やっています。ですがやはり、先生方には限界がおのずとあります。なぜかという校長先生も先生方も、2年から3年ぐらいで転勤します。そういう中でこういうことやろうと思っても、時間がないのでなかなかできない。

そういう中で、この委員会は、もちろんいろいろなご意見伺いながら、やはり大枠をつくってあげる、組織をきちっとつくってあげるというのが、私はこの委員会の仕事じゃないのかなと思います。

これからはやはり、先生がさっきおっしゃったようにハード、組織です。組織づくりをどういうふうにするかというふうに絞っていただいて、その中に盛り込むいろいろなソフトは、先生方は全部専門家ですから、それは魅力ある内容作りをしてもらえばいいわけです。

我々がここでハードをつくる段階でのその魅力づくり、そういうことはもちろん学習していかなければいけませんけれども、ある時点でそれができれば我々は組織づくりをしっかりして差し上げる。先生方が、力が発揮できるような組織づくりをしてあげるというのが、私はこの委員会の仕事じゃあないのかなと思っています。

以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。

（遠山委員）

ちょっと、お聞きしたいと思っています。ハードづくりというのは、どのようなことを指すのでしょうか。具体的に。

（西村委員）

組織ですよ。だから例えば「総合学科をどうしましょうかとか、多部制・単位制を導入しましょうか」とか、そういうのはハードづくりだと思います。組織、組織づくりです。

（遠山委員）

はじめのハードというのは、違うね。普通はお金かけてつくって、学校現場はやりやすいので、そういう整備があるような、そういう組織ですか、少し違う感じが思っています。長野県の人間が外に出て行って、長野県の教育だけじゃ勤まらないのですかね。

（西村委員）

いや、そんなことはないと思いますが。

(遠山委員)

私はここで今、お聞きして非常に残念なことは、この教育をしっかりやって外部に出て行って、外国へだって行っている人間が、いっぱいいますよ。

いろんなところで活躍して、長野県は決して劣っているとは思わないです。長野県で教育を受けて、今までだって長野県で教育を受けて、あるいはみんなそれぞれ自分の能力を発揮して、私は特にそれは東大合格率とかは知りません。だけど、こういう面では私は決してほかの県には劣っているようには見えないわけなのです。

(西村委員)

私は、劣っているとは言っていないです。

ほかの県のいろいろな動きをよく知った上での教育をしてほしい、していきたいと思っています。私は劣っているとは思っていません。価値観が多種多様でいろいろな人間が、今、いますから。長野県の教育を受けた人がそういった集団の中へ、飛び込んでいくんです。だから、いろいろなところで、どんな動きをしているのか、それを我々はよく知った上で教育すべきじゃないですかと言いました。

私は長野県の教育が悪いとは全然言っていないです。

(芹澤委員)

何か議論もいろいろあっちこっちいっているのですけれども、結局考え方として今の高校に求められているのは、先ほど中沢先生が言われたように、ある意味では進路の選択それから職業の選択。これをどう生徒にとって、母親にとってうまくしてやるかというのが大きな目標と同時に、いろいろな高校生がたくさんいますからそういうことで高校生の生徒の側に選択肢を広げてやる、これも重要だと。

そこで選択肢を広げるために今、いろいろ研究されているように総合学科があり、特色ある学科があり、多部制等、定時制を含めて学部があるのだから、そういう部分を広く今、総合学科は1校だけですが、4通学区というような提案もあるようですから、それは当然私は素晴らしいことだから進めてほしい。また生徒の教育の選択肢を広げる意味で多部制なども採用してほしい。そういうところで議論を進めていけばこの委員会の存在価値が出てくるんじゃないか。

魅力をつくる例として、資料を見てもかなりいろいろなことが議論されています。そのうちの特に主なものをこういうふうにしたらいいか、というふうなところに議論を進めていかないと、教育問題の在り方をどうするかという部分は百人百様でいろいろなことがあるとまとまらないと思うのです。

問題はやはり1面、全部ではないですが、先生の質を高める。このことも重要だと思います。先生の質を高める。これは研修等で今後教育委員会等で積極的に取り組んでもらえばいい問題で、ここで議論するのは選択肢を広げてやる。そして進路選択とか、職業選択に間違いのないようにしてあげる。このことを中心に議論をしていかないと期間が限られていた中では進んでいかないのではないかと思います。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございました。
ほかにご意見はいかがでしょうか。

(萩原委員)

1 ついいですか。

私はすぐ人の意見に流されますけれども、この総合学科は確かいいのだったらここで一気に私どもとしてもその地域を考えて、ここで選択肢が広がればここでやるべきだと思うし、進学なら進学で今、名門校というのもあるからそこを重点的に整備するのか、通えない人の分も考えて進学コース、今つくっているところもいっぱいあるから。そういうところで例えば能力別授業をしてしまうとか、要するにはっきり方針を決められると。ただ 1 校減らすか、減らさないかということはお互いに問題なのだけど、魅力ある学校づくりにするには、じゃあ、もう 2 つぐらい総合学科を増やして、その単位制をもう少し増やして、ここは大きく上田と佐久とに分かれると思うのです。その中で 1 校ずつはやってみなければ分からない。やはりはっきりと示すべきだと思うのです。

それで教育委員会は 1 校、2 校減らすと言うけれども、それを 2 つにしても、その中から 1 校にしないというのは決定なのでしょうけれども、それを 2 つにしちゃえと。例えばそういった格好で子ども、それから先生、親というものはありますから、先ほど先生が言われたように、入試で輪切りにされて、「あなたはこっち、あなたはこっち。前期入試もあります。後期入試もありますよ」と言いながらも成績別で振り分けていって、ある程度学校の成績上位になればどこの学校にも行けるよということも 1 つの方法だし、そうなれば単位制の学校に私は行きたいというふうに出てくるだろうし、入試までいってはいけないかもしれないけれども、いいことはやはりここではっきりボーンと打ち出すべきだと思うのです。2 つなら 2 つ、3 つなら 3 つとやっていく。

以上です。

(中沢委員)

今のご意見で、最終報告 10 ページでははっきり、各通学区にそれぞれ 1 校以上の配置。1 校以上の配置だから、予算的なバックもどの程度保障されるか分かりませんが、この委員会とすれば、本当にそういう必要性があるならば、上小に 1 校、佐久に 1 校というようなそういう方針も可能だと、私は解釈しましたがね。

どうなのですか。

(飯島委員長)

最終報告からいくとそのような方向ですね。ですから議論を十分重ねた上で最終、この報告がそうなる分にはやぶさかでない。

どうぞ議論を次に続けたいと思います。

(原 委員)

やはり議論はまだ、かみ合わないのしょうがないのですが。

先ほど太田委員から質問があった件で答えるのですが、私はこういう言い方をよくするのですが、高校時代は3つの発見があると。まず自分自身を発見すること、2つ目は友だちを発見すること、他者を発見すること、3つ目は未来を発見すること。未来というのが、先ほどからいろいろな方がご指摘になっている、進路、就職ですかね。自分の目指す未来とスタンス、そういう問題なんです。そういう意味では、先ほど非常に困難極まる学びの逃走ということを、縷々(るる)申し上げましたけれども、そういう中でも現実に高等学校は小さな学校であれ、大きな学校であれ本当に健闘して、この学校で学んでよかったという思いを大半の生徒諸君が持って卒業していっていると思うのです。

このことはとっても大事なことで、先ほど遠山委員が引きこもりだった子が、皆勤をしたと。私も実は、昨年小商の定時制に行き行って驚いたのですが、中学3年間不登校だった子が4年間皆勤ですよ。しかも1日も遅刻もない、早退もない、1時間の欠課もない。この驚くべき変ぼうです。

今、それこそ新しい道を探し、特に何というか分かりません。そういう今日、困難な中でも高校教育が果たしている重要な役割として、あらためて考えていきたいと思います。

2つ目は先ほど市川委員から「中学は、本当に朝から夜遅くまで大変で議論の余裕がない」ということがありました。私も友人たちが大勢、小学校、中学校にいますのでそういう話も聞きますが、とても大変だと思います。ご苦労さまと思いますと同時にこれは異常なことだと思います。やはり余裕をもって高校はどうあってほしいという議論を中学のほうで学校の現場から発信をする。そういうことが教師なんですね。高校側も近年、本当に忙しくなってきた、私は定時制にいますが全日制の教職員が8時、9時まで残っているのはざらです。本当に忙しくなっていると思います。どうしてその多忙を、あるいは多忙感から解放されてくると言いますか、そういうことが必要になってくるのです。

もう1点だけ述べさせていただきます。

先ほどいったようにいわゆる一般的な魅力問題と総合学科とか多部制問題、少し切り離して議論したほうが良いと思っているのですが、そうは言っても多部制の問題、あるいは統合学科について振られていますから、これはやはり丁寧な議論が必要かと思うのです。例えば多部制・単位制はお話のように、この第2通学区に1校設けるわけですね。これは定時制の問題ですから、これをどこにつくるか。どなたがこれをお読みになっても分かると思いますが、例えば上田地区につくったら、基本的には佐久のほうの定時制の子どもは通えません。よほど、しなの鉄道の沿線でない限りです。今の定時制の生徒たちは、本当に近いから通えるのです。皆勤もできるのです。こうした問題をその問題を本当にリアルに見ていかないと多部制・単位制は、私は考え方としては大変面白い。これは私も思っているのですけれども、とても心配です。今日はその1点だけにしておきます。

そのあとの問題も、これも十分検証が必要だと思うのですが、つまり普通教育と専門教育を合体させていくと。さまざまな選択を組み合わせしていく。その中で、これは特に専門高校にかかわるわけですから工業とか、農業とか、商業です。それが仮に総合学科に転換したときに、従前持っていた工業の専門性が薄められることはないか。ただ工業高校を私はよく知りませんが、3年間の間にいろいろな資格を習得しますね。これが総合学科のい

わゆる工業課程、工業系の学群を学ぶ中でその資格が保証されるのか。どうですか。商業にもいろいろな資格がある。農業にもありますね。だからそういう専門性の育成と、専門性を具体的に保証する資格問題がどうなのかという議論です。これはまた、きちっとした資料に基づいて、お話をしていく必要があると思うんですね。

（飯島委員長）

ほかにいかがでしょうか。

だいた意見が前に進んだり、後戻りしたり、あるいは最終報告の中の議論をもう一度掘り起こしたりという形をしていますけれども、ただ初めに申し上げましたように私たちの問題は、こういう意味合いで設置されているということをもう一度頭に置きながら、しかも最後はすべての生徒が学校に魅力を感じ、なおかつ1人1人の個性を十分に生かすことのできる高校をいかに配置し、つくっていくか。そういうことに私たちは委員として委嘱を受けているわけですから、十分その辺を踏まえて、行ったり来たりで、私は構わないと思います。

思うところを出していただいて、そして、このあと、どういうふうにもっていくか先は分かりませんが、ただ私たち、長野県に住む高校生たちがより良い環境で教育を受けられる。その施設や環境をつくってあげるというこの1点は、それぞれ何ら変わらないと思いますから、ぜひ引き続き、総合学科、あるいは多部制・単位制、あるいはそのほかにいろいろな魅力あるプログラムが、最終報告の中には書かれていますけれども、今、原委員がおっしゃった、心配事項を含めてもしありましたらご意見をいただきたいと思います。

（小林委員）

魅力ある高校で話し合っているのですけれども、それがまだ、適性配置の議論に影響するのかしないのか。影響しないとすれば魅力あるというのは単に「こうだこうだ」となるけれども、それが連動して考えなければいけないというふうに、なったときに「前に話し合ったこれだから」というふうに、今度は各高校が逐一上（そじょう）に乗ってくるのかどうか。その辺が迷っていて何とも発言ができないのです。

ということで魅力ある高校と適正配置の関連を切ってしまったなら、気楽といったらおかしいですけれども、県教委に「こういうふうに考えます」、あとは「向こうのほうで、4地区で話し合ったところでいいです」ということになってくる。一応第二通学区では「2校減らせ。その方向でどうだろうか。それはどこだろうか」というふうに問われているのです。

それで、1校は多部制・単位制でというふうになってきたときに、今、魅力ある高校で話し合っていること。子どもの動機付けが大事だと思います。教育技術的なことで先生方も苦労していると思いますけれども、一番はそこに来ている子どもたち、小中学校、高校もそうですけれども、本当に面白いのは勉強しようという動機付けをやれば自然に転がっていくのです。例えば文部科学省のほうでということ、ゆとり教育が出ているわけですが、親は評価しているが子どもは駄目だ、先生方もどうも忙しすぎて駄目だと。今、願いとはですけれども、先生が本気になって、そこで子どもと格闘しながらやりさえすれば

ば、ゆとりは自然に生まれてくるような気がするのです。

いちいち「ゆとり教育のために」ということで、それはまだ本質的に教える先生がその核心をつかんでやっているところまでまだ来ていない。先生の質とか、あるいは先生方の研修なんてところに話題がきていますけれども、ただ枠だけまねしているのようになっていくのかなと思うのです。

何か新しいものが出てくれば枠をつくってその中に当てはめればいいのかというように。「枠があったから枠のとおりになりました」と。それは子どもと同じで「いけないのは誰か」「この枠をつくったのがいけない」とそちらのほうにいつてしまうわけです。

そういう意味でここでは、連動するかどうかが大事成ります。学校は地域に信頼されなければいけない。学校は、親にも子どもにも信頼されてこそ、地域密着ということが、大事になってくるような気がするのです。ただ進学、進路だけでいい、就職だけでいいということではなしに、魅力ある学校というのはそういうものじゃないかなというような気がします。

私は、小中学校のほうでかかわっていますもので、地域からそっぽ向かれて学校だけでテストやって、いい点を取っていますなんていっても、いい学校なんて言われたいです。

そのようなことで、魅力ある学校づくりと、適正配置を今後私は議論進めていくときに、どういうふうに進めながら進めていけばいいのかということがはっきりすれば、この議論は行ったり来たりということではなしにいくんではないかなと思います。

連動して、あるいは関連するとすればどの程度関連するのか、今日、こんなに資料を配っていただきましたけれども、これを逐一どの学校がどうだというふうにして、今、魅力あることをやっているのか。12月までの間にその学校が「今度こうすることで」というふうに、魅力ある方向を考えているのか。その時点で我々は判断下すのか。

あるいはもう少し先にいって「内容はこうだ」というのになるのか、それによって考え方は今とはガラッと変わってくるような気がするのです。魅力あるというのは、今後の10年、20年、30年向こうを見据えての魅力といっているのか、今を、ここで淘汰（とうた）していくという事は今の時点での各高校の魅力を話し合っていくのか、その問題になるような気がします。

ある高校は青写真でこんなふうになりましたけれども結局、いろいろな関係でできなかったというふうになってもいけないような気がします。

以上です。

（飯島委員長）

また戻りそんな感じがしますけれども、この件についてのご意見はどうでしょうか。

（佐藤副委員長）

この進め方は、どだい無理があると思います。議題は1、2、3とありますね。

それはどちらかというと我々委員へのレクチャーですよ。一番簡単に議論を進めるのだったら早い話が具体的に、第2ブロックに多部制を大体幾つつくるのかとか、それから普通校なら幾つ、そういうふうにしておけばおのずと議論は見つかります。

今はもう教育論全体を含めた、言うならば総論を話しているわけですから当然ゆったり

した議論も当然で今日はそういう意味で全委員がレクチャーを受けて、お互いに意見を交換しながらのレクチャー。

今日の議題はそうなっていますから。今、皆さんいらいらしていると思います。何かこの核心の話早くしたいんだけど。行ったり来たり、収拾がつかないようで。議題がそうなっているんですからいいんです。だから今日は我々がこれからいよいよ煮詰めていくときの、勉強だと思えば、私はこれでいいと思う。だから、全委員があらゆること言ってもらっていいんじゃないでしょうか。

（吉江高校教育課長）

今、佐藤委員さんからお話をちょうだいしまして、今日私どものほうで、委員会の次第ということでお示しました議事が、1 から 3 までであるということ。本当は、それは本来ですと（1）だけにしておかなければいけないかなとか、もうひとつも、取りあえず事務局としても、こんな形にさせていただいた次第です。

そういう意味では、本日ご提出した資料も、非常に多岐にわたっておりまして、そういうことからそれぞれの皆様方のあらためて再認識をいただけるようなことも必要かと思っております。

そんな関係で、若干これまでお話が出ていた中で幾つか事務局のサイドで、最近の長野県教育委員会としての1つの動きにつきまして、お話を申し上げます。

当然ながらご存知の方もいらっしゃると思いますが、まず教員の資質の向上ということ。これについては最終報告のほうにも出ているように、かなりアンケートの中でも大きな比重を占めております。一般の保護者の方にいたしますと、やはり先生たちの努力が足りないという目で見られかねないのは正直申し上げて現状でございます。

そんなこともございまして、今、長野県の教育委員会といたしましては、1 つは教員に対しての研修制度の充実ということを改めてやっております。例えばの例でいたしますと、教員の場合にはややもすると視野が狭いというようなことをよく言われます。もちろん教育の専門家ではあるものの、なかなか世間に疎いというようなご指摘をいただく関係もございまして、研修も従来私どもの総合教育センターというようなものが現在ありまして、そこでの多くは座学による研修が多かったわけですが、外に出た研修など、そういうようなことも充実を図っていく。

またそれとは別個に、今まで教員の場合には、教員評価という制度はございませんでした。例えば県の場合で申し上げますと、行政の場合には、ひとつの申告とかあるいは自己申告とかいろいろな制度もあったわけです。そういうような制度が今までありませんでしたものを、この4月に教員評価検討委員会というところの最終報告を受けまして、近々周知を図った上で施行に入りたいと考えておりますが、いわゆる自己評価を校長が見て、最終的にそれに対してのアドバイスをして、次年度以降の全体的な事業に反映させていくというようなことも始めております。こういうようなことについては、本当にいろいろな住民の皆さまからのご意見を伺ったことということでやっております、今後もこのようなことはさらに広げてまいりたいと思っております。

ちょっと言葉がよくないんですけれども、ややもしますと公立学校、あえて高等学校とまで申しませんが、当然来るお客を待ち受けていて、あまりよくないものでも提供するよ

うなものが、公立の学校であるというようなことを指摘されるようなこともあるようです。そんなこともありまして、ある意味では文部科学省においては、ここにきて非常に開かれた教育というようなことを盛んに申しております。そんなことから、開かれた学校づくりということで、学校開放とか、さらに進んで現在は、学校評議員制度というようなことを使って、学校にいろいろな方をお招きしてという部分。

そんなことも含めまして、過日も第1回目のときにご説明いたしましたように、コミュニティ・スクールや、そういうような制度になるように、やってきているわけなのです。

それで、私どもが魅力づくりということで今、考えておりますのが、ある意味で各委員さんからいただきましたように、どの辺までというようなお話もちょうだいしていたわけなのですが、言ってしまいますと、私どもとしますと、それぞれの委員会において、それぞれの地域の学校に対していろいろご提案している中で、例えば大筋で共通項としまして、こういうようなものを今後取り入れていくのが公立の高等学校には必要ではないかというような議論はしていただきたいと思います。と思っています。

それで加えて、もし可能であれば、今後それぞれの学校に対して個別の議論をできるのであればしていただければと思います。例えばの話として申し上げますと、今こちらのほうの地域には、例えば英語科がある学校とか、これを私どもは特色学科と言っていますが、あるいは国際教養科のある学校とか、さらには音楽科がある学校があるわけですが、そういうようなものをどうしていくかというようなことも含めて、議論いただければと思っています。

ただ今回の高等学校改革プランそのものもそうなのですが、深い意味での教育論にまで議論をしていただいております。

と言いますのは、今回、過日のご説明の折にも申し上げたのですが、私どもがあくまでも今回検討委員会の委員にお願いし、さらに今回推進委員会に、次なるステップということでお願いしているのが、教育論に立ち入った内容ではなくて、言ってしまいますと魅力づくりというような先ほど来お話があるように、ある意味で大議での教育論ではなくて、具体的に組織などをイメージしてのものということでイメージづくり。さらには適正な配置というようなことを合わせてお願いしているという次第でございますので、その辺を踏まえまして、ぜひご議論を進めていただければと思っている次第です。

(遠山委員)

結局、今日のところは導入ということでしょう。この議論。

最終的には多分学校数を減らすことですよ、私はそのように見ていたが。何の学科と言うけど、今日は交流にして、とにかくこういう話から拾って行って、それで学校の管理、ね。

私どもは今、こちらの方の言われたとおりですよ。何やったらいいかという感じです。今のこの話はいったい何だと、そういう気持ちです。

だから、この間も新聞に出たが、吉江課長が「たたき台」の「たたき台」として出したと言うけど、私はそれが今日出ると思って来たんだ。何かね。それに対して、文句を、と思ってきたんだよ。でも、文句が言うことがなくなっちゃってね。

(中沢委員)

そういう意見も分かるのですが、私はやはり佐藤委員がおっしゃったように、基本的には「魅力ある高校とは何ですか」ということを皆で議して、ある程度のそういうベースに立っていないと、議論は進まないと思います。

魅力ある高校に対してのいろいろな意見は当然あっていいとは思いますが、ある程度そこは深めておかないとまずいわけです。

この最終答申の 21 ページに「審議を進める際の基本的考え方」ということの中ではっきり書かれています。1 つは「魅力ある高等学校づくり」であり、もう 1 つは「高等学校の適正な規模及び配置」と。これがやはり私どもの基本的な議すべきところだと思います。

最終的には適正な規模や配置を検討しなければいけない、答申しなければいけない。けれどもそのベースに、これからの社会に対応したどういう高校でなければならないのか、少子化・高齢化・情報化、そういった社会に対応できる高校は何なのか、そういうことをやはり魅力ある高校づくりと関連づけて、方向をみんなで議してからでないと、次の適正規模だとか配置とかということは、私は論議できないのではないかとことを思います。

本当に今日の時間はそれなりに意味があるかなと私は解釈しています。

(飯島委員長)

今日まだ発言を全然していない委員の方がいらっしゃいますけれども、もし何かございましたら。

(宮阪委員)

私は一応保護者ということで出席をさせてもらっていますので、話が難しくついていけないところがありますけれども、東信地区の高校の配置を見ますと、場所的には、しなの鉄道や小海線の沿線にあるという高校が多いですが、通学にそれなりに便利であることからかと思っております。私の中学校は山間部にありまして、高校へ行くためには親もそれなりに大変な思いをして通わせております。

また公共の交通機関というのはバスだけでありまして、路線とか本数も少なく、通学費も負担が大きいわけです。また、上田のほうまで通うとなりますと、しなの鉄道の駅まで自家用車で送り迎えしたりとか、子どもが自転車で通ったりとか、あるいは学校まで親が送迎したりとかいうようなことが必要になってきますし、下宿という人もいます。自転車で行ったとすると帰りは坂道を上ってくるので、非常に大変なわけです。そんな中で直通のバスで通学できる高校という存在は非常にありがたいと思っております。山間部から子どもを高校に通わせることを考慮して、高校づくりについて考えていただければありがたいと思っております。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(滝澤委員)

私もいろいろと勉強しながら、今日話を聞かせていただいているつもりでいるのですが、1 つはどうするのかなというところで非常に興味があるといえますか、重要なことだと思っているのは、現在ある高校のブランドといいたいでしょうか、その高校の偏差値みたいなことがありますか、そこまで踏み込んで再編みたいなことを考えるのか、それは残しておいて再編みたいなことを考えるのかといったときに、ずいぶんパターンが変わってくるのではないかなというふうに思っています。90 数パーセントも高校へ進学するときに、偏差値で高校を分けていって、ある人気のある高校に偏差値の高い人たちだけを集めていってというパターンが、これからも通用するのだろうかという、その辺のところは非常に問題ですし、そこをどうするかによって、高校の配置をするのかということころは、ずいぶん話が変わってくるのではないかなと思いながら聞いておりました。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(荻原委員)

先ほど教育委員会のほうから、おのおのの特色ある学校の評価というようなお話もありましたが、そんなおこがましいことは私はできないと思います。

歴史を見ても 10 年からずっと始まって、最近では本年までみんな特徴があるものをつくっているわけでしょう。それを 10 年もたたないうちに評価しろとか、ちょっとそれは自分たちで評価してくださいよと言いたくなるよね。私どもにそういう評価をしなさいとか、しなさいという言い方もないのだろうけど、そういうことはよくないと思います。

私たちは言われた役割は分かっていますし、あえて受けたいきさつなどは言いませんが、そういうところを考えないと。私どもに全責任を負わせるように「高校を評価しろ」とか、自分で言うのも何だけど、おこがましいし難しいと思うんです。全体的なところを見て地域校は大変だから、そちらを総合学科にしてまとめるとか、せいぜいそのくらいの言い方しかできないと思います。

それは、意見として聞いておいてください。

(佐藤副委員長)

それに関連して、僕ばかり発言していて申し訳ないんですけども、最近新聞を見ると、毎日どこそこの同窓会が存続の陳情をしたとか、どこそこの町が加わったとか、そういうことはひっきりなしによく行われていますが、私はこのブロックに関しては、現時点では個々の学校じゃなくて、上田だって、野沢だって、それは全部対象ですよ。再編するからには全部対象。だからどこからか情報が流れているかどうか知らないけれども、うちの学校が憶測の中でつぶれていくからこうするではなくて、少なくとも結果的にそうなったとしても、このブロックでは、定員の問題からすべてを見直して、「こうあるべきだ」という線を出すべきであって、どこそこの高校のみをどうするなんていうことは、私は全然考えていないですね。再編を、頭の中でこれから考えていく場合は。

だから、早い話が 9 学級ある高校を、例えば 6 学級にしたら 3 学級はオーバーフローじ

やないですか。最終的に具体的になってくれば、そういう人たちがどこへいくのかということだって考えなければならない。陳情がおかしいなと思っているのですが、どこそこ高校がというのは、それは考えていない。僕は少なくとも考えていない。これから話し合っていく、具体的な話をしていく場合にはね。ここにある学校はみんな対象ですよ。第2ブロックの中の、定員から何から全部を対象にすることが再編でしょう。ここは残して、こう切ってあとはこうだったというのでは再編ではない。単なる切るだけ、削減するだけです。

だから例えば合併したところの高校だったら、その学校の名前を付けるのではなく、非常に魅力のある学校の名前を付けるとかだって考えられます。

全部を対象にする、私はそういうふうに理解しています。

(飯島委員長)

さあどうでしょうか。こういう付け加えの議論が今日はあと10分できます。どうぞお出しください。

(原 委員)

委員会の審議日程です。場合によって、例えば要綱にありますけれど、部会はどうするのか、そんなことも少し議論した方が良いと思います。

今佐藤委員がおっしゃったことは、私はとても重要だと思います、全てが対象であると。そうであるが故に、削ったり、なくす校名が出たら困るのです。

これはぜひこの会でも確認してもらいたいと思います。

(飯島委員長)

はい。まず2点ありました。

1つは今後の日程です。この会の進め方の日程。今年1つの報告をするという日程が決められておりました。そこまでのことをできるのかどうか。

(原 委員)

私は、そういうことを言っているんじゃなくて、例えば次回がいつやるのかということと、その中に部会の設置のことがあると、微妙に委員会の回数を減らして部会が、その間に続くのかという問題があるでしょうから。

(飯島委員長)

部会はここでつくるのか、つukらないのかってことはここでは言えないんじゃないでしょうか、どうでしょうか。その時点で、論議の中でどういうふうに移んでいくかわかりませんが、その時点で必要になれば必要になってくるでしょうし、また事務局のほうへどうだろうということ投げかけていくことではないでしょうか。しかも部会は教育委員会が委嘱するようになっていますから、私たちが委嘱するわけじゃありませんから、その辺の方も含めて、……

(芹澤委員)

これだけのメンバーがいるからあえて部会をつくらなくても。部会をつくって何かをするよりは、部会は私は必要ないと思います。

(飯島委員長)

ここで必要と思ったら、つくると。

あえて現時点でつくるんだということは必要ないと思います。

(遠山委員)

ちょっといいですか。

佐藤先生の話に戻りますが、本当はそうなれば一番いいと思います。学校の名前も、上田高校をサカウエ高校に変えとかね。小諸高校を変えてなんとかという学校にしようとか、これでみんな、できれば私はこれでやったほうがいいね。

先生には、ちょっと申し訳ないけど、本当に名前変えとなれば、みんな納得しないし、同窓会もあるし、その地域の人もあるしね。学校というものは地域で、同窓会などで支えているものであって、私のほうは、ここでこういうことをやっていたらとんでもないとやられちゃいますよ。

私のほうはやっていられないというから。確か、南信のほうですか。あれはもっともだと思います。ああいうふうにみんながただ、政治的に動いていかれなくて、あそこでつぶされることは大変なことなのです。あれは別に県教育委員長の言うように、郷愁、ノスタルジーがあるというものではないですよ。経済問題です。だから遠くへ行く子どもというのは、それだけよそへ出て行くのに金がかかるのです。5万も6万もかかるのです。

そういうことを忘れて、しまってはね、今も続いている、ずっと末代までこの学校がなくなることによって、この地域の子どもはそれだけの範囲で終わっちゃうわけです、親が。そうすると、高校だけでやめる人もできるし、収入20万や30万もらっていて6万取られて、また2人もいれば10万も取られるなんてことになれば、子ども出せないですよ、学校へ。これは例えば、県で足りない分を援助してくれるとなればいいけれども。そういう問題なのです。

だからそういうことを、よく考えて。

(飯島委員長)

それは、また次回ということで。

(遠山委員)

結論まで言わないと結局何言ったのか分からなくなってしまうから…。

(飯島委員長)

委員長というのは、言いたくても言えなかったり、いろいろあり進行を上手に進められず申し訳ないと思うのですが、再編学校名を出すということ自体も是々非々で、ある時点で「おい、出すじゃないか」という話にならないとも限らない。先ほどから最後まで、こ

の第2では出さないで審議を進めようという話ならば、みんなが意思統一の上でその形で審議を進めるというのもいいでしょう。

ですからここで、原委員、出さないとか出すなとかここで決めなくてもいいのではないのでしょうか。

そんなことで。

(原 委員)

いや、だから私の意見を申し上げて。さっきの話では、私が言ったのは佐藤さんのご発言を受けて、少なくとも全ての学校を再編整備対象になるということで、例えばそこで時期尚早にあまり名前など出すことをしても、それ議論にならない。

そのことを言ったのです。

(飯島委員長)

はい。分かりました。

それではもう時間も迫ってきました。それぞれの皆さんのご理解で、とりあえずいろいろ意見を出して、互いのポテンシャルを合わせようという意味合いからも、行ったり来たりしてしまいました。無駄な時間だったと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、これからの議論の中で、私は決して無駄ではないと思います。

私たちがもう一度考えておきたいのは、高等学校改革プランの推進委員に委嘱されたこと。しかもそれは最終報告にのっとった3つの事項に返答すべく、報告を出すようにということです。最終報告書の21ページに「ブロック単位の高校再編の検討」というのも出てきております。その意味合いが書かれております。委員の皆さんは、もう十分最終報告書はお読みだろうと思いますが、もう一度目を通していただき、事務局方から出た資料にも目を通していただきながら、この委員会をこれ以降運営していきたいと思っています。不手際ばかりあって、大変申し訳ないと思っております。

それでは次回の委員会をいつ開くかということで、皆さんのご意見をいただきたいと思うわけであります。第二が一番早くやっておりますが、このまま早めにどんどん行くほうがいいのか、どうぞ事務局のほうで何か試案がありましたら。

(植松主任教育支援主事)

次回の日程につきましてでございますが、また調整させていただきまして、委員長さんともご相談しながら、日程等を決めていきたいと思っています。

(飯島委員長)

そうですか。それではまた事務局のほうで。

(原 委員)

ちょっと、お願いします。

この前、希望調査をなさいましたよね。それで見ても決まらないですか。時間まで。

(萩原委員)

毎回日曜日ということでそれはそれでいいが、例えば7月、8月ぐらい向こう2カ月間ぐらい例えば第2日曜第4日曜とか、そのぐらいに見通しが立ってもらったほうが、私を含め皆さんも都合がいいのではないのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

今、ちょっとお話にありましたように、取りあえず、過日、ご予約をちょうだいしてあります。

今、原委員さんからもお話いただきましたように、それぞれ皆さんもご予約ありますので、なるべく早い時期に日にちを見て、あらためて次回以降の予定を、できれば2~3回の予定も、可能であればお示しした上でお伝えしたいと思いますので、ちょっとそれぞれの皆さん方のご希望も、若干まだ整わないところがございますので、本日はそういうことでご理解いただければと思います。

(飯島委員長)

事務局でそれぞれ調整をしていただいて、また県教育委員会の定例会とかいろんな動きを含めながら次回以降を決めていってください。

それでは次回の開催は、また事務局方から連絡をさせていただくということで、お願いしたいと思います。

大変進行不手際がありましたことをおびいたしまして、第2回の委員会を終わりたいと思います。

ありがとうございました。